

# 時計のない村

小川未明

青空文庫



町まちから遠とおく離はなれた田舎いなかのことでありませぬ。その村むらには、あまり富とんだものがありませぬでした。村むらじゆうで、時計とけいが、たった二つぎりしかなかつたのです。

ながあいだ、長い間ながあいだ、この村むらの人々ひとびとは、時計とけいがなくてすんできました。太た

陽いようの上のぼりぐあいを見て、およその時刻じこくをはかりました。けれど、

この文明ぶんめいの世よの中に、時計とけいを用もちいなくては話はなしにならぬというので、村むらの中うちでの金持ちかねもちの一人ひとりが、町まちに出でたときに、その町まちの時計とけい屋いやから、一つの時計とけいを求めたのであります。

その金持ちかねもちは、いま、自分じぶんはたくさんかの金かねを払はらつて、時計とけいを求めもとめることを心こころの中うちで誇ほこりこりました。今日きょうから、村むらのものたちは、

万事ばんじの集まりあつや、約束やくそくの時間じかんを、この時計とけいによつてしななければならぬと思つたからであります。

「この時計とけいは、狂くるうようなことはないだろうな。」と、金持ちかねもは、時計屋とけいやの番頭ばんとうにたずねました。

「けつして、狂くるうようなことはありません。そんなお品しなではございません。」と、番頭ばんとうは答えました。

「それなら、安心あんしんだが。」と、金持ちかねもは、ほほえみました。

「この店みせの時間じかんは、まちがいが無いだろうな。」と、金持ちかねもは、またききました。

「けつして、まちがつてはいけません。標準ひょうじゆんじ時あに合あわせてございます。」と、番頭ばんとうは答えました。

「それなら、安心だ。」と、金持ちは思つたのであります。  
 金持ちは、買った時計を大事にして、自分の村へ持つて帰りま  
 した。

これまで、時計というものを見なれなかつた村の人々は、毎  
 日のように、その金持ちの家へ押しかけてきました。そして、  
 独りでに動く針を見て、不思議に思いました。また、金持ちから  
 時間の見方を教わつて、彼らは、圃にいつても、山にいつても、  
 寄ると時計の話をしたのであります。

この村に、もう一人金持ちがありました。その男は、村のもの  
 が、一方の金持ちの家にばかり出入りするのをねたましく思いま  
 した。時計があるばかりに、みんなが、その家へゆくのがしやく

にさわったのであります。

「どれ、俺も、ひとつ時計を買ってこよう。そうすれば、きつと俺のところへもみんながやってくるにちがいない。」と、その男は思ったのです。

男は、町へ出ました。そして、もう一人の金持ちが時計を買った店と、ちがった店へゆきました。その店も、町での大きな時計屋であったのです。男は、いろいろな形の時計をこの店で見ました。なるだけ、珍しいと思つたのを、男は選びました。

「この時計は、狂わないだろうか。」と、男は、店の番頭に問いました。

「そんなことは、けつしてございません。保険付きでございます

。「と、番頭ばんとうは答えこたました。

「その時計とけいの時間じかんは、合あっているだろうか。」と、男おとこはたずねました。

「標準ひょうじゆんじ時じに合あっています。」と、番頭ばんとうは答えこたました。

「ねじさえかけておけば、いつまでたつてもまちがいはないだろうか。」と、男おとこは、念ねんのために問といました。

「この時計とけいは、幾年いくねんたつても、狂くるうようなことはございませぬ。」と、番頭ばんとうは答えこたました。

男おとこは、これを持もつて帰かえれば、村むらのものたちが、みんな見みにやつてくると思おもつて、その時計とけいを買かつて大事だいじにして村むりへ帰かえりました。

もう一人ひとりの金持かねもちが、別べつの時計とけいを町まちから買かつてきたといううわ

さが村むらにたつと、はたして、みんながやってきました。

「時計とけいをどうぞ見せてください。」と、村むらのものたちが、口々くちぐちにいいました。

男おとこは、そういつてくるだろうと思おもっていたところへ、みんながやってきましたから、得意とくいになつて、

「さあ上あがつて見みなさい。なかなか機き械かいのいい時計とけいなんだから、この時間じかんばかりは安心あんしんしていいのだ。」と、男おとこはいいました。

村むらのものたちは、時計とけいの形かたちがか変わかわっていましたので、

「やあ、これは珍めづらしい。」といつて、その時計とけいの前まえに頭あたまを集あつめてほめそやしました。

しかるに、不思議ふしぎなことには、村むらに二つ時計とけいがありました、



どうしたことが、二つの時計は約三十分ばかり時間が違っていました。どちらが違っているのか、だれもそれを知ることができないのであります。

「この時計は狂っていない。標準時に合っているのだ。」と、ひとり一人の金持ちがいいいますと、

「この時計こそ合っているのだ。上等の機械で、町の時計にちゃんと合わしてきたのだ。」と、他の金持ちがいいいました。

ふたり二人の金持ちは、たがいに自分の時計を正しいといつて譲りませんでした。ちようど、二つの時計は厳かなおきてのように、村のものは、二つに分かれて、一方は、甲の金持ちの時計を正しいといいました。一方は、乙の金持ちの時計を正しいといいました。

いままで、平和であつた村が、時計のために、二つに分かれてしまいました。時計は神さまのようになってしまったのです。

「今夜、六時から集まる。」と、いい合わしても、一方のものは、おつかねも乙の金持ちの時計が六時になると会場に集まりましたが、一方のものは、甲の金持ちの時計が六時にならないので集まりませんでした。それで、三十分あまりも、二つの時計の時間が違つていましたから、前に集まったものは、後からきたものに対して、待たされた小言をいいました。

「俺たちは、ちゃんと六時にきたのだ。こちらの時計に狂いはないはずだ。それは、おまえさんたちの時計がまちがっているからだ。」と、後からきたものはいいました。

「いいや、私<sup>わたし</sup>たちのほうの時計<sup>とけい</sup>はまちがっていない。おまえさんたちのほうの時計<sup>とけい</sup>こそまちがっているのだ。」と、前<sup>まえ</sup>に集<sup>あつ</sup>まつたものがいいました。

こうして、時計<sup>とけい</sup>によつて双<sup>そう</sup>方<sup>ほう</sup>が争<sup>あらそ</sup>つたのです。

「待<sup>ま</sup>つてやつて、理<sup>り</sup>屈<sup>くつ</sup>をいわれるようじゃつまらない。さつさと時間<sup>じかん</sup>がきたら、仕<sup>し</sup>事<sup>ごと</sup>を始<sup>はじ</sup>めてしまふがいい。」と、早<sup>はや</sup>い時間<sup>じかん</sup>を信<sup>しん</sup>ずる組<sup>ぐみ</sup>は、遅<sup>おく</sup>れた時間<sup>じかん</sup>を信<sup>しん</sup>ずるものにかまわずに、相<sup>そう</sup>談<sup>だん</sup>を進<sup>すす</sup>めるようになりました。

こんなようなことで、つねに時間<sup>じかん</sup>から、双<sup>そう</sup>方<sup>ほう</sup>の争<sup>あらそ</sup>いが絶<sup>た</sup>えませんでした。そのうちに、ふとしたことから、乙<sup>おつ</sup>のほうの時計<sup>とけい</sup>が壊<sup>こわ</sup>れてしまいました。いままで、毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>まわっていた針<sup>はり</sup>が、まっ

たく動かなくなつてしまつたのです。

神さまのように、その時計の時間を信じていた乙のほうの組は、その日から真つ暗になつたように、まったく時間というものがわからなくなりました。

そうかといつて、いままで、争つていた甲のほうへいつて、時間をきくのも恥と感しましたから、

「俺たちには、もう時間がないのだ。」といつて、村の相談があつても、時刻がつねにまとまりませんでした。

甲の組は、さすがに、自分たちのほうの時計は狂わない正しい時計だと、いよいよその時計のありがたみを感じたわけです。こ  
うなれば、乙の組のものも、こちらにしたがわなければならぬと

思おもつていました。それで、相そう談だんがあるときは、

「午後六時ごごじより。」というように、時じ間かんを定きめて、乙おつのほうへ通つ知うちをいたしました。けれど、時とけい計けいを持もたなくなつた乙おつのほうは、六時じがいつであるかわかりません。こんなことで、いつも相そう談だんが、はかどりませんでした。

時とけい計けいが二つあつたときよりも、一つになつたときのほうが、村むらのまとまりがつかなくなつたのです。甲こうのほうも、案あん外がい乙おつのほうぶんが自分じぶんたちに従したがつてこないと知しると、困こまつてしまつたのです。「町まちへいって、時とけい計けいを直なおしてこなければならぬ。」と、乙おつのほうひとりの一人ひとりがいました。

「直なおしたってしかたがない。壊こわれるような時とけい計けいは、もう信しん用ようす

ることができない。」と、他の一人がいました。

「そうすれば、どうしたらいいのか。」

「壊れない、いい時計を探してくるよりしかたがない。」

「そんな、いい時計は、どこへいったら見つかるだろうか。」と、乙のほうは、寄ると集まると口々にその話をしたのであります。

乙の金持ちは、

「今年、酒がよく造れたら、遠い町へ行って、いい時計を買ってこよう。」といいました。

そうしているうちに、ふと、ある日のこと、甲のほうの時計も壊れてしまったのです。自分たちのほうの時計は、けつして狂うことはないといって、いばっていました。ついにその甲のほう

の時計とけいも壊こわれてしまつたのです。

「やはり、時計とけいなんかというものはだめだ。すぐに壊こわれてしまう。信用しんようのできるものでない。」と、一人ひとりがいいますと、

「時計とけいがあつたつて、なくなつて、この一日いちにちには変かわりがないじやないか。」と、他たの一人ひとりがいました。

甲こうのほうでは、乙おつのほうの時計とけいも壊こわれてしまつたのだから、いまさら、急いそいで新あたらしい時計とけいを、町まちへいつて求もとめる気きにもなりませんでした。

乙おつのほうでも、甲こうのほうの時計とけいが壊こわれたと聞きいて、いまさら、町まちへいつて新あたらしい時計とけいを求もとめるという気持きもちが起おこりませんでした。

村は、いつしか、時計のなかった昔の状態にかえたので  
 す。そして、頼るべき時計がないと思うと、みんなは、また、昔  
 のように、大空を仰いで太陽の上がりぐあい、時間をはか  
 りました。そして、それは、すこしの不自由をも彼らに感じさせ  
 なかったのです。時計が壊れても、太陽は、けっして壊れたり、  
 狂ったりすることはありませんでした。

「時計なんか、いらない、お天道さまさえあれば、たくさんだ  
 。」と、いって、みんなは、はじめて、太陽をありがたがりまし  
 た。そして、集会の時刻も太陽のまわりぐあいできめまし  
 たために、みんなは、また昔のように一致して、いつとなく、村  
 は平和に治まったということでありませぬ。







# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「婦人公論」

1921（大正10）年1月

※表題は底本では、「時計《とけい》のない村《むら》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 時計のない村

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>